

子どもの思いを大切にした 外国語授業

～バックワードデザインで子どもが目的をもって取り組む授業づくりを～

PROFILE

福森 一真 ふくもり かずま (鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭)

1984年、鹿児島県生まれ。現在、鹿児島大学教育学部附属小学校で、英語専科として1年生から6年生まで19学級の外国語を指導している。2017年に鹿児島県総合教育センターの長期研修にて、外国語活動についての研究を行った。研究内容は「自分の思いをより豊かに伝え合う児童の育成を図る小学校外国語の授業づくり—音声と文字を円滑に接続するための工夫を通して—」。鹿児島県外国語科・外国語活動研究会、事務局。



1 授業のバックワードデザイン

小学校外国語活動・外国語科授業をデザインしていく上で、大切なことは、「小学校4年間を見通した指導計画」にするということです。そのための第1歩として、まず、第6学年の卒業段階での子どもたちの姿、すなわち、目指す子ども像を設定することが必要です。目指す子ども像を設定することで、そのような子どもに育していくためにはどのような手立てが必要になるかが明確化されていくからです。本校外国語科では、「他者と良好な人間関係を築くことができる子ども」を目指しています。意思疎通の壁を越えて、外国語を用いて他者と良好な人間関係を築くことができる子どもということです。

この姿に向かって、各学年で身につける力をバックワードデザイン(逆向き設計)していきます。各学年で身につける力を設定したら、その力を身につけるまでの過程を各学年の年間指導計画として、バックワードデザインしていきます。このように、本校の外国語授業は、バックワードデザインの考え方で作られています。

新学習指導要領では、小学校から高等学校まで統一された「資質・能力の育成につながる外国語教育の学習過程」というものが示されました。①コミュニケーションの目的や場面、状況等の設定と理解、②目的に応じた発信までの方向性の決定と言語活動の見通し、③目的達成のための言語活動、④まとめと振り返り、となっています。ここで重要なのが、①にも出てくる「目的や場面、状況等の設定」です。活動を行う時に、何のためにそれを行うのかを児童が意識できるよう、具体的な場面設定をすることが、どの単元においても必ず行われることとされています。

単元計画作成においても、バックワードデザインの考え方を用います。まず、子どもたちに単元を通して身につけさせたい力を設定します。その力を活用することができる単元終末の言語活動を想定し、その活動に向かって逆向きに1時間ずつ設定していきます。そうすることで、スマールステップで、子どもたちに力が身についていくとともに、単元を通して、自分の思いを伝えたいという意欲を高めていくことが期待できます。

2 実践例① Let's try 1 Unit 4 I like blue.

具体的な単元計画の作成について説明していきます。Let's try 1 Unit 4 のI like blue.を以下のような手順で計画し、実践しました。まず、学習内容を吟味し、I like ~. やDo you like~?が使えるようにしたい、相手に配慮した伝え合いをさせたいという目標を設定しました。次に、新学期が始まって1学期経とうとするが、互いのことにについて意外と知らないことが多いという学級の実態を基に、目指す子どもの姿を以下の通り設定しました。

- ・I like ~. Do you like ~? に慣れ親しみ、友達に配慮してインタビューを行うことができる。
- ・インタビュー大会を通して、よさを新たに発見し、互いに認め合う。

さらに、この姿を表出させる単元終末の活動として、「お楽しみインタビュー大会をしよう」を実施することにしました。そして、この活動に向かって、バックワードデザインしていきます。



第3時です。インタビューする際にI like~. Do you like~? Yes, I do. No, I don't.の表現を使います。第3時では、特にDo you like~? Yes, I do. No, I don't.の表現に慣れ親しませる言語活動を設定します。ここでは、主に話すことを中心とした活動を取り入れました。

第2時です。第2時では、特にI like~.の表現に慣れ親しませる言語活動を設定します。ここでは、「聞くこと」の活動から「話すこと」の活動へと徐々に活動を移していました。

第1時です。第1時では主に単元の見通しをもたせることが重要視しています。なぜ、この単元を学ぶのか、この単元を学ぶことで、何を身につけるのかをしっかりと理解させることが大切です。私は、この単元の導入で、最終時のインタビューカンファレンスのデモンストレーションをしました。その中で、子どもたちに興味や関心をもたせるため、「I like 仮面ライダー. Do you like 仮面ライダー?」と尋ねたところ、「えー、うそー。」や「知らなかった。」と良い反応が返ってきたので、「みんなも、友達の意外な好きなものを知りたくないですか?」と発問し、単元の目標を作っていました。



第1時からスマートステップで語彙や表現に音声で十分に慣れ親しんだ子どもたちは、第4時には「早く友達にインタビューしたい。」と、自信たっぷりな様子でした。活動後の振り返りでは、「英語が友達に伝わって良かった。」や「友達と同じ意見だったから、前に学習したMe, too.と言いました。」、「友達の新しいことが知れるうれしい。もっと知りたい。」といった、様々な角度からの意見が出ました。

本校では、今後も授業のバックワードデザインを通して、子どもたちが自信をもって思いを伝えることで、他者と良好な人間関係を築くことができる子どもを育成していきたいと考えています。

引用・参考文献

- ・小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(文部科学省)